

グレイズピーク・エルバート山

4 348m

4 398m

アメリカのロッキー山脈にある 4 000m 峰に四つ登るといってツアーに参加した。といってもそのうちの一つは登山電車での登頂である。山脈というと、山また山の険峻なところを想像するが、アメリカのロッキーのうち今回行ったコロラド州の部分は全体が丘の連続といったような感じを受けるところであった。

2 006 年に行ったアシニボインを中心にしたカナダのロッキーとは対照的である。しかしその高さは町の部分でも標高は 3 000m 以上であったりして、日本の感覚では計り知れない。



今回のガイドは、アメリカ人のビルとジョーダンである。二人とも日本での生活経験があり、日本語は堪能である。誰でもが思うことであるが、われわれは 10 年も英語教育を受けてもまったく使い物にならないのに、彼らは 2 年程度の日本滞在で習得している。しかもその技能を基にして、自分の仕事にまで発展させている。

ということで、日本からの添乗員はいなくて、シアトル経由のデンバーまでは結構心細く、デンバーの飛行場でジョーダンに声をかけられたときにはホッとした。

パイクスピーク (4 301m)

最初は登山電車を使つての登山である。線路の真ん中に歯車の線路があつて、これで電車を引き上げるわけである。日本では南アルプスの井川鉄道の一部でこの方式が用いられており、アプト式と呼ばれているが、ガイドのビルは“歯車電車”と呼んでいた。まあこれで4 300mまで運んでくれるのであるから楽なもんだ。パイクスピークの頂上には土産物屋と食堂を兼ねた店があり、鉄道ともども結構繁盛していた。今まで私がよく行ったネパールなどの観光を産業とする国々では、遊びに来るのは外国人ばかりであつたが、ここにはアメリカ人ばかりでありわれわれは“外人さん”である。ナンカ、このパターンには慣れない。

登山電車の中では、案内係の若いオネエチャンがいろいろ説明してくれるが、私にはサッパリ聞き取れない。意外とわがオバチャンたちが反応して笑つたりしている。ナマイキばばあめ。

今回のツアーは男が7人で女が8人の構成である。最高年齢者は千葉の弁天さんの80歳であるが、あとはいつものように60歳代が中心に見える。



登山電車

歯車



登山電車の中

ビル

アメリカの車のナンバープレートはこんな風に、地域の特性を織り込んでデザインされている。けっこうおしゃれ。



ガイドのビルは日本の企業での勤務経験もあるということで日本語はぺらぺら。ガイドとしての客も日本人が95%であるという。サービス精神が旺盛で、最終日のマルーンベルズやエバンス山などは予定スケジュールには載っていなかったが連れて行ってくれた。ジョーダンはまだ26歳でアシスタントという抜いだ。長身・小顔・優しいの条件が揃つており、日本ではもてたことであろう。



ジョーダン

グレイズピーク (4 398m)

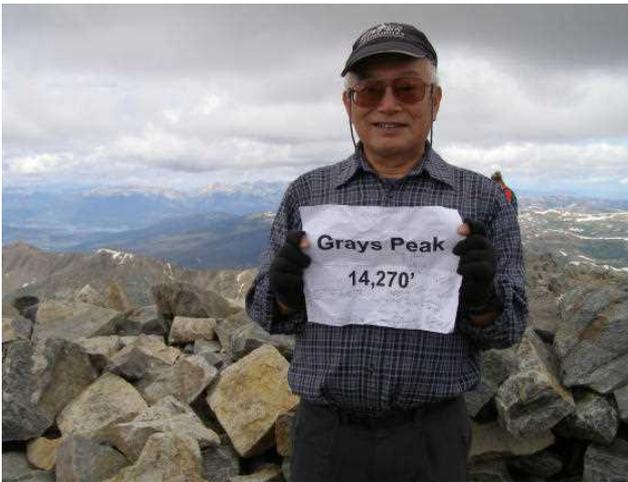


グレイズピーク(左)とトレイズピーク(右)

今回の山行で一番厳しくなる日はずであった。しかも天気予報は雨の確率が高かった。朝は4時15分に出発と言われていた。しかし顔ぶれが揃わない。やっと揃ったと思ったら、誰かが忘れ物を取りに戻ってしまった。結局ホテルをスタートしたのは4時40分を過ぎたところである。いろいろなツアーに参加してきたがこんなことは初めてだ。

まあスタートが遅れてくれたおかげでヘッドランプなしで歩き始めることができた。天気も曇り空ではあるが青空も少しは見える。山容は極めてなだらかである。ということは遠い、長い。日本の山のように険しい山は遠くに見えていても、近づくときは早い。しかしここはいつまでも遠い。いやになっちゃうが高山植物がそのところを慰めてくれる。





結構遅れる人も出てきた。ビルは辛抱強いほうでじっと待っていることが多い。あまりにも待ち時間が多いので、もう頂上が間近という所で先に行かせてくださいと、シビレを切らしてしまった。そんなことをやりながらも何とかグレイズピークにたどり着くことができた。最後の人が来るのを待って下山にしたので1時間頂上にいたことになる。アメリカの山では犬を連れた登山客が多い。犬にとってはうれしいことなのかどうか判らない。でも四つ足は坂道には便利そうだ。

日本ではトウヤクリンドウと呼ばれるペイントブラシがたくさんある。これの赤い花になったインディアンペイントブラシも鮮やかだ。シバザクラ・マーガレットなども競うように咲き乱れている。私の大好きなおだまき（コロラド州の州花：現地名はコロンバイン）があり、ワタスゲやキンポウゲもたくさんある。キンポウゲに似たミヤマダイコンソウのような花もあった。



インディアンペイントブラシ



シバザクラ



おだまき



ワタスゲとキンポウゲ

もう一つのピークであるトレイズピーク(4 347m)は、時間的な余裕などを考慮してビルが中止を判断した。帰国後、アルパインツアーから“一つ登れなくて申し訳ありませんでした。”という電話があったが以下の理由でこの判断は正しかったと思う。

- (1) ビルは、トレイズピークに行くためには10時半にはグレイズピークを通過して12時にはトレイズピークに着きたいと言っていた。しかし我々はグレイズピークに11~12時の間にばらばらに着いた。すでにタイムオーバーである。
- (2) メンバーの疲労度に差が大きく、全員同じ行動をとることは不可能であった。

これだけでトレイズピークを選択肢はなかった。しかしビルの説明は、トレイズピークに行ったときにはもう一度グレイズピークに戻らなければいけなく、途中の雪渓も危険であることを理由に挙げた。しかし私には両ピークの鞍部から下山路をたどることは可能であるように思え、事実たくさんの方がこのコースをとっていることが良く見えた。もしかしたらビルは(2)の理由を説明すると傷つく人が出ることを慮ったのかも知れない。アメリカ人にもそんな感覚があるのかなあ。結果的には帰った時間などを考慮するとビルの判断は正しかった。車に乗って走り出した途端に雷を含む大雨になった。



イワベンケイ



ウサギギク



ペイントブラシ



アズマギク

ブレッケンリッジ → アスペン移動

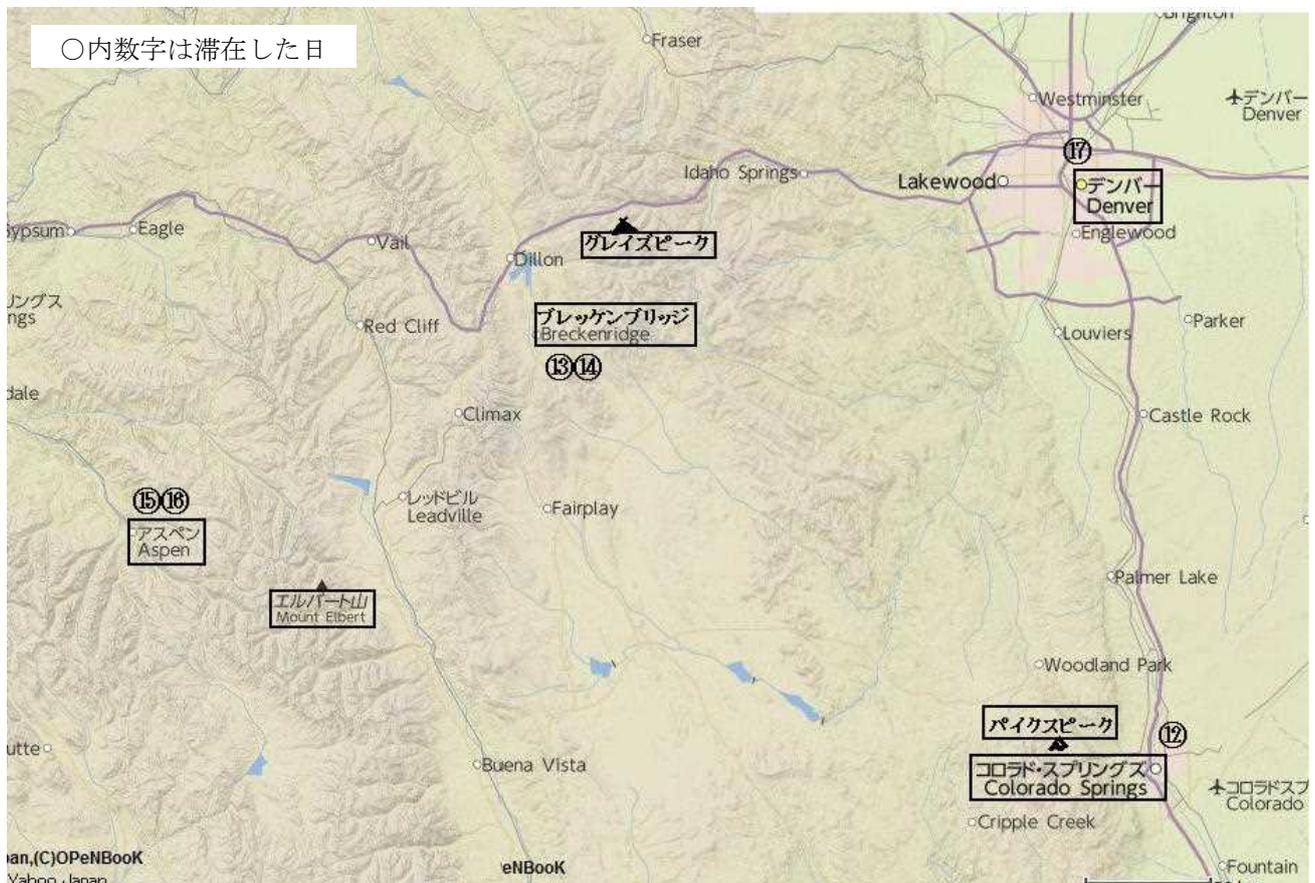
グレイズピークの拠点のブレッケンリッジからエルバート山の拠点のアスペンまでは単なる移動と思ったら、セントエルモのゴーストタウンの見学が組み込まれていた。昔は金や銀の鉱山開発が行われていたところで、ゴーストタウンとして保存されているみたいだ。といっても古い建物がそのまま保存されているだけで、日本の同種の観光施設みたいに、鉱山の中の昔の様子を再現までは再現することは行っていない。だからちょっと迫力には欠ける。ここの土産物屋の玄関の上でハチドリを見た。ハチドリのために水のみ場を提供しているのだから飲みにくるみたいだ。したがってハチドリ特有のホバーリングの様子はあまり見ることができない。マチュピチで見たときは花の蜜を吸い込むために飛んでいるところを見ることができたので、もろにホバーリングを見ることができたが、ここではその感動はない。大きさもマチュピチで見たものより一回り小さい。しかしこのハチドリはよく鳴いた。マチピチでもここでもハミングバードと呼ばれている。ビー・バードとは呼ばない。この鳴き声を聞いているとハミングバードという呼び方も理解できる。



ゴーストタウン



ハチドリ (ハミングバード)



エルバート山(4 398m)



マッキンレーなどを含むアラスカの山を除けばエルバート山が北米で一番高いらしい。しかしこの山もだだっ広い山容であるので、北米一などという形容が似合わない。グレイズピークもそうであったが山頂標識などというものは無い。お花畑の中だろうとどこを歩いたって構わない。日本の山のように植生保護の名を借りた土建業者保護のための木道だらけの景色もない。

日本の山では、最近はどこへ行っても木道だらけである。ここではそういった人工的なものは一つも無い。もちろん自然の形の違い



もあるわけであり、雨の降り方などの天候の条件の違いもあるが、日本は少し神経質すぎる。ただしこちらは道標すらろくに無い。あってもペンキが剥げていて字が読めない。山頂の標識すら無い。もうちょっと面倒見てちょうだいよということも確かである。ビルが話していたが、以前に日本人がエルバート山で道を間違えてメンバーと離れてしまったことがあったといていた。本当にここには何にも無い。

グレイズピークでは 3 400m 位にある駐車場を過ぎればすぐに森林限界であった。このエルバート山は 3 600m 位が森林限界である。日本より 1 000m 高い。

最終日

最終日はデンバーへの移動だけの予定であったが、サービス精神旺盛なビルは二つのイベントを用意してくれた。午前中はマルーンベルズという観光地への立ち寄りである。40分くらい歩いたところに池があって、これに写るマルーンベルズという双耳峰の岩山が売りである。平日にもかかわらず結構観光客がたくさんいる。やはりアメリカは余裕がある人が多いのか。



池に写ったマルーンベルズとロジポールパイン

池のほとりに茂る林はロジポールパインである。カナディアン・ロッキーでもたくさん見たが、アメリカン・ロッキーでもいたるところにある。ジョーダンの話しではアメリカ大陸の西側にはこの木ばかりたくさんあるということだ。気候の違いのせいかカナダのほうが少し細かったように思う。



ヤナギラン

午後はエバンス山である。4300mクラスの山のほぼ頂上まで車で行ける。これでトレイズピークを登らなかった埋め合わせにするつもりみたいだ。このツアーのうたい文句通りに4000m峰4座になった。俺にはどうでもいいことであつたがこだわっていた人もいた。



エバンス山

メンバー

80歳で長老の弁天さんは「百歳万歳」という雑誌に山登りをする元気なおじいさんとして紹介されたことがあるらしい。この記事のコピーを数部持ってきていて私ももらった。この記事によると1日30000歩を歩くトレーニングをしているという。60歳前半で奥様に先立たれて、自暴自棄になっていたところを山登りで立ち直れたということで、最初に海外に出たのが72歳のときであるという。そろそろ山登りも終わりに近づいてきたと思っている私などヒッパタカレそうだ。

次が私と同室であった70歳の北今市さんである。恐妻家で、ひたすらおかあちゃんに怒られないように心配りをしている。細かいことにこだわらない人であるので同室の身としては非常に気楽であった。山の経験は浅いようで、どのような山へ行ったらいいかなど周りの意見を求めていた。この厳しくない山で息を切らしていることが多かったのもう少し普段のトレーニングを考えたほうがよさそうだ。

それに続く私の次は、私より誕生日が1日遅い佐保台さんである。名詞の裏にいろいろ書き込んでいる。山の歩き方は非常にバランスがよく、その割には普段のトレーニングなどは特にやっていないという。ただ、日常生活のすべてにおいてフットワークが軽く、スッと体が動く。剪定が趣味というが、年間70件くらいこなすということで素人の範囲ではない。外人との対話も臆するところが無い。このような人を昔はうらやましいと思ったものであるが、最近は俺は俺よと開き直るようになった。この歳になって自分の本質を変えられるわけないもの。

今回唯一の夫婦参加は神奈川の大野さんである。愛妻家であり、グレイズピークでは自分は先に頂上に着いていて、遅れてきた奥さんを迎えるにかなり下まで降って行って、一緒に登り返してきた。すごい。

徳島の吉野さんは、今回のメンバーの中で最も山に情熱を持っている人といえる。日本百名山は当然として、各県最高峰も終わらせたということだ。かつては製薬会社の技師であり、若いころからやっていた山登りを、定年を迎えてから本格的に取り組んだようであるが、徳島に住んでいて日本全国を対象とすることは結構骨が折れることと思える。車の運転はぜんぜん苦にならないということが幸いしているようだ。話の様子ではまだまだ山への情熱は燃え尽きていない。

最若年は65歳の原さんである。歯科医であり、独立しているので山に来るときは休診するという。大阪の歯科医師会では副会長の肩書きを持つのでえらい人らしい。でもものん兵衛であるところがうれしい。

ババ連隊はこれより平均年齢でもう少し高いようであるが、最若年はこの中にいるようだが、その人でも成人過ぎた息子がいるという。残念ながら女性とは論評を加えるほど親しく話さなかったものでこれだけしか言えない。歳の事なんかに触れたらバケテ出られる。

DETAIL	
生産年月	1944年6月
生産地	広島県呉市
賞味期限	2024年6月
ペンネーム	もっこり
趣味	登山 づいづ 砲艦 剪定
座右の銘	一期一会 日々是新
好きな漢字	志 行 凜
好きな山	槍ヶ岳 剣岳 穂高連峰 アマダグラム マッターホルン

かつては山岳ガイド協会 主宰

佐保台さんの名詞うらがき



おまけ アメリカの入出国

ESTA

アメリカの入国に際しては入国審査書類として ESTA の事前登録が義務付けられている。2009年に南米パタゴニア行った際にも経験しているので、勝手知ったることとしてパソコンから気軽に申請を行った。アルパインツアーに頼むと4000円だかの手数料を取られるのでとんでもないと思った。パソコンで ESTA と入力して検索したらすぐに申請ソフトが出てきた。前の時と画面のイメージが違うなと思ったがそのまま入力をして一件落着。俺の能力からすればこんなことなんていうことないよ、と一人ごちた。ところがそれから数週間後、クレジット会社の請求が多いので内容を調べてみた。なんと ESTA 申請料が6500円とある。本来は14ドルのはずである。銀行やクレジット会社に当たっても訳が分からない。アルパインツアーに聞いたら、“アメリカ大使館を検索してから ESTA と入力しましたか？”という。そうすれば14ドルで済むみたいだ。そんなこと説明書類には書いてあったか覚えてないよ。そういえば請求書の相手先も ESTAsia とかになっていた。この請求先を検索して細かい書類の隅々を読んでも確かには6500円いただきますと書いてある。完全に俺の早とちりだ。もしかしたら2009年の時も同じ失敗をして気が付かなかった可能性がある。4000円の損失、居酒屋一回分。

出国

アメリカという国は、入国に際しては ESTA みたいな「何の役に立つのであろう」と思わせる書類を強要したり、指紋や写真を撮ったりしてうるさくチェックする。しかし出国に際してはパスポートのチェックさえない。こんなことってないだろうと、シアトルの飛行場ゲートの待合室で他の旅行社の添乗員らしい女の子に聞いてみたら、“さっきゲート窓口で航空券を受け取った時にパスポートを見せたのがそれに相当します。”と教えられた。したがって私のパスポートには、アメリカへの入国スタンプはあるが出国スタンプはない。落語に「そこつながや」というのがあって、行き倒れで死んでる人を前にして“お前が死んでるんだよ”と友達に言われた男が、“行き倒れで死んでる男は確かに俺だが、今ここに立ってる俺は誰なんだろう！”というのがあった。アメリカからの出国スタンプがないから俺はいまアメリカにいるはずだ。それなのに、今日本にいる俺は誰なんだろう？

おまけ 80歳で山に登るということ

弁天さんが、“80歳の方が山に登るといことはどんな感じなんですかね。”と聞かれたときにこう答えていた。“80歳で山に登るといことは、80歳になって登って見ないとわかりませんよ。”エルバート山からの下りで、みんなから数十m遅れて弁天さんが歩いていた。たまたま花の写真を撮っていたら弁天さんの足音がすぐ後ろから響いてきた。しっかりとした歩調で、それなりにリズムカルな響きであった。普段からの節制を思わせるものがある。山で現せるものは、その普段からの節制の一端に過ぎない。